

地場産業における社会的分業体制の基礎構造

——多摩結城の衰退過程——

関 満 博

一 は じ め に

周知のように日本の伝統的な地場産業は、生産工程の著しい分業を基礎に、各段階に零細な企業を生み出し、それらを組織する形で産地形成している場合が多い。このような産地の社会的分業体制のもとで、各産地の分業の実相や組織形態等が注目され、実態的な分析や類型化が進められてきた。⁽¹⁾ これらの研究が日本の産業問題研究に重要な貢献をなしていることは否定できないが、いまだ実態把握や類型的理解にとどまっているため、日本の地場産業が社会的分業を基礎に形成され、その分業体制がどのような内的論理に従って展開していくかの法則的理解を必ずしもわれわれに与えない。かりに、産地の社会的分業体制が変化していく過程をとらえる場合でも、近代化という圧力によって発展的に再構成される側面や、⁽²⁾ 独占資本による収奪機構形成の一環としての再編の側

地場産業における社会的分業体制の基礎構造

地場産業における社会的分業体制の基礎構造

(3) 面といった、社会的分業体制自体にとってはむしろ外的要因による構造変化などに着目する場合が多い。そのような場面は、われわれの現実認識からするならば比較的とりあげやすいものではあるが、社会的分業体制自体が有する展開過程の内実の全てをわれわれに明らかにするわけではないだろう。むしろ、外的要因を一応捨象して、産出する製品のライフサイクルや市場条件との対応で、社会的分業の内実がどのように変化していくかなどが問われなければならない。産地の社会的分業は市場拡大や産出する製品の高度化などによって深化したり、あるいは市場縮小によって解体し、さらには再編成されていく。事実、一つの製品のライフサイクルが衰退期に入り、産地が次の新たな製品に転換せざるをえない場合などには、新たな分業者と交代し、新たな体制として確立されていく。このような社会的分業自体の循環的な展開過程は、分業者個々の問題というよりは、分業によって特殊な性格を付与された個々の分業者と、それらを組織化する側との客観的な相互依存関係によって規定されていくといつてよいであろう。

筆者がこのような社会的分業体制の内面的な展開過程を問題にするのは、マニファクチュア論争や小宮山⁽⁴⁾藤田以来の下請論争の過程を通じて、分業を組織していくという意味での商業資本的支配による問屋制家内工業や下請制が、「資本主義の正常な成長のために好ましからぬもの⁽⁴⁾」という暗黙の了解を得ながらも、分業的色彩ははまだ、さらにこれからも広汎に残存し増殖し続けているという日本産業全体の現実を直視するからにはかからない。これは在来的な地場産業だけにいえることではなく、形を変えながらも、最も現代的な産業であるといわれている電気機械工業や自動車工業などの近年における社会的分業利用の進展、つまり内作から外注への切換えという現象にも一貫して現われている⁽⁵⁾。そのような意味で、在来的な地場産業の社会的分業体制の展開過程

の内的論理を明らかにするということは、日本の産業発展の基本図式を得るための一つの基礎的な作業ともなりうるわけである。

このような問題の全体像をここで明示的に提出することは筆者のなしうることではないが、以上のような問題意識を基礎に据えながら、本稿では生産の社会的分業体制の衰退局面に限定し、その場合の分業の組織形態、分業者の置かれる状況等を一つの事例を用いながら検討していくことにしたい。その場合のわれわれの事例は、約四〇〇年の歴史をふまえ全国でも有数の織物業地形成をしている八王子織物業の中の最も伝統的な織物であり、昭和三〇年代に入ってから急激に衰退の一途を歩んでいる「多摩結城」生産の社会的分業体制である。

なお、ここで特に衰退局面の問題にするのは、発展局面以上に社会的分業体制自体に内在する問題、つまり矛盾が先鋭化すると考えるからである。事実、以下で扱う多摩結城の生産に関する社会的分業の実態は、分業者の状況を著しく困難にし、分業体制そのものに根底からの問題をつきつけている。そのような意味で、わずか一つの事例による試論にしかすぎないが、多摩結城生産の社会的分業体制の現実を直視することにより、地場産業における生産の社会的分業体制の意味を考えることは、産業問題研究にとっても有意義であるといつてよいであろう。以下、われわれは八王子織物業とのかかわりで多摩結城の現状、多摩結城生産の社会的分業体制、下請加工業者の位置と問題という順序で検討をすすめていくことにしたいと思う。⁶⁾

(1) マニファクチュア論争以来、こうした研究は膨大に蓄積されている。最近の集約されたものとしては、山崎充『日本の地場産業』ダイヤモンド社、昭和五二年、辻本芳郎『日本の在来工業』大明堂、昭和五三年、などがある。

(2) 近代化を内を含む地場産業の構造変化を扱った代表的なものとしては、宗藤圭三・黒松巖編『伝統産業の近代化』有地場産業における社会的分業体制の基礎構造

地場産業における社会的分業体制の基礎構造

斐閣、昭和三四年、下平尾勲『経済成長と地場産業』新評論、昭和四八年、などがある。

(3) この種の問題は、例えば繊維独占資本による産地企業系列化といった形で議論される場合が多い。最近のものとしては、竹田秀輝『戦後日本の繊維工業』大明堂、昭和五一年、などがある。

(4) 藤田敬三『日本産業構造と中小企業』岩波書店、昭和四〇年、二二九頁。

(5) 近年の機械工業一般の生産体制の再編成は、内作から外注へ、あるいは内作から購買へという方向へ進んでいる。一般に労働費用が高まり、技術革新が高額設備などを必要とする方向に進んでいるという状況のもとでは、生産を内部化するよりも外部化した方が危険負担が少なく有利であるといわれている。この点については稿を改めて検討したい。なお、これに関連しては、佐藤芳雄『寡占体制と中小企業』有斐閣、昭和五一年、中央大学経済研究所編『中小企業の階層構造』東洋経済新報社、昭和五二年、などが示唆的である。

(6) 本稿で八王子織物業の中の多摩結城を事例としてとりあげることができたのは、昭和五二年夏に実施した東京都商工指導所の業種別診断の際、産地構成業者と長期にわたって接触する機会を得たことによる。なお、多摩結城の全体的な分析については、東京都商工指導所『業種別診断報告書(多摩結城)』昭和五一年、を参照されたい。

二 八王子織物業と多摩結城

八王子織物業は約四〇〇年の歴史をふまえて存在している日本でも有数の規模を誇る地場産業である。⁽¹⁾この八王子織物業は関東の他の絹織物産地、例えば結城、桐生、伊勢崎、秩父などと共に近世以来順調な道を歩んできたが、八王子の場合、江戸という一大消費地に最も近接した産地であったことから、他産地と比較しての著しい特徴を有するに至っている。それは現在の「複合産地」といわれている点であり、常に需要地である江戸からの

(第1表) 八王子織物の生産 (昭和51年)

区 分	生産数量(点数)	生産金額(千円)
多摩結城	9,317	197,567
正絹女物着尺	21,393	802,815
シルクウール着尺	79,071	842,236
ウール着尺	695,197	5,384,343
合化織着尺	114,245	294,451
女物羽織	131,458	370,435
ひとえ御召	225,441	1,244,912
男 物	554,403	5,646,463
正絹男物	14,125	454,034
そ の 他	98,895	299,755
小 幅 計	1,943,545	15,536,012
ネクタイ地	430,160	5,576,775
マフラー類	148,247	875,191
広幅雑貨その他	31,646	675,456
輸出織物	2,705	52,402
広 幅 計	612,758	7,179,824
合 計	2,556,303	22,715,836

(資料) 八王子織物工業組合

多様な要求に迅速に対応できる形で生産体制を組み立て、また時代が要求するあらゆる製品を送り出すことによつて生き抜いてきたという歴史的経緯によつて性格づけられたものである。つまり、流行に敏感であり、あらゆる種類の織物を手掛けたという歴史的経過から、それらが内部に蓄積され、現在でも全国のほとんどあらゆる織物を産出できる産地構造になっているということである。⁽²⁾ その結果、他産地にありがちな単一製品の単一生産組織

という形とは著しく異なつて、ほとんどあらゆる種類の織物、そしてそれに対応する賃機方式から大工場方式に至るあらゆる形態の生産組織を内に含むことになっている。それらを総称して、八王子産地は「複合産地」の名称で呼ばれているわけである。

このような中で、以下の事例として扱つていく多摩結城は八王子四〇〇年の歴史的蓄積を背景に、ほぼ大正末から昭和の始めに現在の形として完成された、八王子織物の技術的頂点に立つものであり、八王子織物業を真に代表する絹織物である。⁽³⁾

この多摩結城の製品としての特徴は、いわゆ

(第2表) 多摩結城の生産推移

年	反数	生産額(千円)	対八王子織物 ウェイト(%)
昭和23	1,262	5,933	0.50
24	9,825	32,247	1.82
25	34,332	170,505	5.52
26	92,215	509,408	12.36
27	149,365	811,530	14.59
28	104,925	600,948	9.49
29	45,424	252,057	5.00
30	21,865	116,202	1.99
31	13,198	66,100	1.12
32	11,660	61,798	1.00
33	4,781	22,597	0.31
34	10,808	65,888	0.68
35	13,808	85,590	0.81
36	13,628	84,090	0.66
37	10,392	70,111	0.46
38	8,136	59,394	0.34
39	8,160	62,230	0.34
40	8,601	77,052	0.38
41	9,352	91,692	0.42
42	11,840	122,764	0.49
43	20,244	214,338	0.81
44	64,418	681,608	2.65
45	77,769	856,130	3.13
46	68,278	662,969	2.46
47	39,680	448,022	1.92
48	19,607	278,654	1.13
49	9,661	200,910	0.93
50	3,534	71,144	0.30
51	9,317	197,567	0.86

(資料) 八王子織物工業組合

る先染めのお召系統の絹織物であり、緯糸に強撚を掛けて、仕上がり後縮めることによって全体にシボを出させるといふところにある。このシボを出すために、後に述べるような張糸、撚糸、整理といった工程に独特な技能が要求され、著しく専門的な職人群を生み出すことになっている。そして、これら職人群による分業をどのような形で組織化していくかが、多摩結城生産の最も重大な側面となるわけである。

ところで、昭和三〇年代の異常な八王子のウール着尺ブーム以降、多摩結城の状況は著しく困難になり、生産量も頂点であった昭和二〇年代末に比べ一五分の一度、生産者も一〇分の一以下になっている。その結果、多

(第3表) 産地構成業者(昭和52年)

区 分	八王子産地全体	多摩結城関係
織物業者	317	10
関連業者	糸染業者	3
	絣加工業者	11 (2)
	張糸業者	34 3
	撚糸業者	145 3
	意匠紙業者	140 3~4
	整経業者	36
	吊り込み業者	10
	整理仕上業者	9

(注)①糸染業者の3社は板締染色のみ。
 ②絣加工業者の2社は織元自らが内部でやっていて、独立した業者ではない。
 (資料)八王子織物工業組合

況である。

以上を総括すると、多摩結城は近世以来独特な発展を遂げてきて複合産地として現在に至っている八王子織物業の中において、その技術的蓄積の頂点に位置している極めて伝統的な織物であり、生産の組織形態は著しく専門化された職人群を問屋制家内工業的に統合している独特な織物であるといつてよい。しかも、多摩結城の現状はまさに衰退局面にあり、分業で成立していた問屋制家内工業的生産体制を維持していくことに極度の困難を生じさせている。このため、以下に検討するように、生産の社会的分業体制の展開に内在する本質的なものが、むしろ先鋭化された形でわれわれに提示されることにもなっているわけである。

(1) 八王子織物業の全般的な歴史については、鯨井惣輔『八王子撚糸業史稿』多摩文化研究会、昭和三六年、正田健一

郎編『八王子織物史(上)』八王子織物工業組合、昭和四〇年、を参照されたい。

地場産業における社会的分業体制の基礎構造

摩結城を生産している集団は著しく縮小し、生産形態も従来からの問屋制家内工業的な形をかううじて維持しながらも、結合の内実は後に検討するように解体の危機に直面しているといつてよい。

また、多摩結城は雨に当たると縮みやすいこと、先染製品であることから地風が地味であること、そのため近年あまり好まれなくなり、現状のまま放置するならば需要はますます減退し、生産の集団は完全に解体してしまうことさえ考えられる状

地場産業における社会的分業体制の基礎構造

(2) 東京都立繊維工業試験場『東京都の繊維工業』昭和五年、八頁。

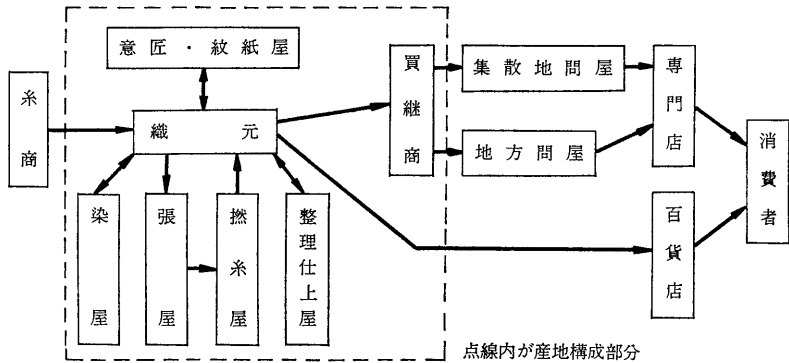
(3) 多摩結城の歴史、八王子織物業全体における位置づけ等については、拙稿「複合産地の中の伝統工芸品」『商工指導』第三一七号、昭和五年四月、を参照されたい。

三 多摩結城生産の社会的分業体制

現在の多摩結城の生産体制の特徴は、生産工程の各段階を分解し、各段階の業者を専門化させ、それらを機能的に組み合わせるといふ分業化にある。その主要工程は染色、張糸、撚糸、意匠・紋紙、製織、整理・仕上げ等に分けられるが、それらは各々染屋、張屋、撚糸屋、意匠・紋紙屋、織元（機屋）、整理・仕上げ屋によって担当されている。この各工程の中で分業体制の軸となり、イニシアティブを握っているのは織元である機屋であり、その他の業者に対して問屋制家内工業的な関係を形成している。

つまり、織元は原糸の生糸を調達すると、まず、染屋にて染色加工を行なわせる（一部は織元の自家工場内で行なう場合もある）。次に、張屋で撚り止めを兼ねた糊付けをする。その後、多摩結城の最大の特徴であるソボを出すための八丁撚糸機による緯糸への強撚を撚糸屋に委ねる。こうして出来上がった糸は織元に戻り、製織が行なわれる。現在の八王子織物の場合、山梨県郡内地方への出機が急速に増加し、織元といっても生産機能を全く保有しない者も増えているが、多摩結城については製織技術にも相当の経験年数が必要であるため、製織工程については自家工場内でまかなっているのが実状である。またこの製織までの間に織元は意匠・紋紙屋に紋紙を作成させ、製織時に使用する場合もある。そして最後に、できあがった織物を整理加工するために整理・仕上げ屋に委託

(第1図) 多摩結城の生産・流通体制



(資料) 東京都商工指導所『業種別診断報告書(多摩結城)』昭和52年, 40頁。

地場産業における社会的分業体制の基礎構造

する。

このように多摩結城の生産は、織元が中心になり各加工業者を組織化するという問屋制家内工業として成り立っている。この場合、各加工業者は一人ないし夫婦二人で専門的に携わっているというケースがほとんどで、しかも取引先の織元が一〜三軒程度であるという專業的家内労働者といつてよい存在である。この点は現在の加工業者の中にはかつて織元の工場で技術を修得し、その後独立したというケースが多いことから理解される。つまり、八王子産地が歴史的に発展していった近世から近代にかけて、農間副業から出発した織物業者は、しだいに拡大していく中で各工程を分離していったわけであるが、その帰結として織元の外業部的な存在としての加工業者を成立させていくことになった。⁽²⁾ その場合、各加工業者は家内労働者として特定の織元の下に組織化されることになっていったわけである。⁽³⁾ この各工程を切り離し分業化していった根底には、一方で、市場からの高品質要求などが強まり、各工程の技術が高度化し、その各工程が專業化し独立する余地が出てきたこと、他方で、織元の規模拡大による危険負担の回避、特に工場制に基づく固定費負担や景気変動調整という意味があつ

地場産業における社会的分業体制の基礎構造

たのだろうか。ここにこそ、産地に社会的分業体制が築かれた歴史的背景があったと考えてよいだろう。

ところで、このようにして形成された分業体制も、その後、特定織元への結合という基本的な図式を基礎としながらも、両者の数が増大する中で、特定織元への固定化にはとられないかなりオープンないわば独立生産者による社会的分業体制として一時期再編成された模様である。この点、多摩結城の最盛期であったといわれる昭和二〇年代後半についてみると、多摩結城生産に携わっていた業者は織元約一〇〇軒、その他加工業者も各工程それぞれ一〇軒程度になっていたといわれている。これはある程度の固定的な関係を保ちながらも、一〇人⁴二〇人規模にも拡大した加工業者は専業者としての位置を確かなものにし、かなり独立的な経営を営んでいたようである。

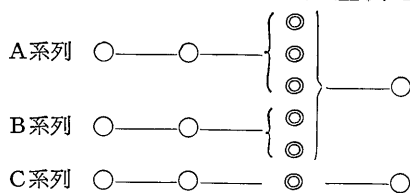
しかしながら、このようにして一つの頂点に達した産地の社会的分業体制も、昭和三〇年以降の多摩結城の衰退の中で、分業という形態を残しながらも質的にはかなりの変化をとげてきているようである。その条件としてわれわれは次の三点を指摘することができる。

第一に、多摩結城の生産量が激減したために、各織元は内部に職人をかかえていくことが困難になってきたこと。

第二に、このため外部の加工業者を利用せざるをえないわけであるが、加工業者も仕事量の激減のために事業所数を著しく減少させたこと。

第三に、以上の条件の下で、織元は生産工程のほとんどを保有していないという身軽さから他の製品への転換を容易に実現したが、分業によって特殊な技能だけに特化させられている加工業者は転換への道をスムーズに歩

(第2図) 多摩結城の各業者の結合図
(張糸屋) (撚糸屋) (織元) (整理仕上屋)



地場産業における社会的分業体制の基礎構造

- (2) 織元が加工業者を組織していく場合には、A・B系列のように複数の織元が数の限定された加工業者に相乗りする形で結合する場合と、C系列のように単独の織元が各加工業者と独占的に結合している場合がある。
- (3) 各系列間の張糸、撚糸屋、整理屋の各業者はお互いに交渉はなく、織元を中心にした単に生産技術上の縦だけの関係という小世界に存在している。
- 以上のような結合関係を総括すると、多摩結城の生産体制は個々の織元中心の閉鎖社会であると考えられ、社会的分業といたながらも特定の織元に特定の加工業者が包含され、織元の自家工場の延長に加工業者が位置づけられるという資本制家内労働の典型として形成されていることになるわけである。このため多摩結城生産が産地の社会的分業体制に立脚しているといいたながらも、加工業者の分業者としての位置が非常に脆弱であり、多摩結城が衰退している現状では様々な問題を発生させることにもなる。

むことができず、数を著しく減少させる中で零細化していったこと。

こうしたプロセスが急激に進行したため、現在の多摩結城の生産は過去の社会的分業体制の形骸を残しながらも、内実はかなりの変質をまぬがれていないようである。

現在の多摩結城生産にかかわる各業者の結合形態は第2図に集約される。これで見ると、各業者の結合関係の特徴としては次のようなものをあげることができる。

地場産業における社会的分業体制の基礎構造

っている。この点、各加工業者固有の問題性については次節で詳細に扱うことにして、社会的分業体制そのものに内在する問題についてここで検討しておくことにしよう。

まず第一は、多摩結城の生産量全体が著しく少ないことから発生する問題である。こうした事態の中で、多摩結城に関する特殊な技能に特化させられている加工業者は、生活するために必要な仕事量を確保することさえ困難なようである。

例えば、C系列のように一つの織元に各加工業者が結合しているような場合、彼らは多摩結城だけでは生活できず、全く関連のない仕事に従事しながら、時々多摩結城の仕事をしているにすぎない。これに対し織元は十分な手当を行ないえず、多摩結城を作り続けていくことと、加工業者を保護・育成していくことに大きなジレンマを感じているようである。したがって、このC系列のような結合の場合には、継続的な生産を保証するという意味での加工業者を組織化し系列化していく経済的基盤が存在せず、過去の分業体制の形骸の上に立ってかろうじて結合しているにしかすぎないとみることができらるだろう。つまり、織元と加工業者の人的な関係によって分業体制が保存されているが、経済的基盤として織元の固定費負担の回避というメリットはあるものの、多摩結城の生産集団として存続していくためには不安定性が強いとしかいいようがない。現在のところ、まだ技能を継承している加工業者群が他の仕事に転換することもできず、経済計算を無視して少ない仕事量に耐えている状態であり、この技能の継承と人的結合という歯止めがはずれる時、多摩結城を生産してきたはずの集団は完全に解体・消滅していくことになってしまう可能性さえ考えられる状況である。

また、複合的な関係になっているA・B系列については、一見独立生産者による対等な関係のようだが、実際

は加工業者の減少の過程で新たに形成されたものであり事態はさらに深刻である。それはC系列の場合にもいえることだが、集団として経済活動を営み、資本制家内労働的な関係となつていゝ中で、実際に織元は単なる発注—受注関係の感覚で仕事をやらせている場合が多いという点である。したがつて、織元には加工業者を保護・育成しようとする姿勢が乏しく、取引条件も下職層にとつてはかなり深刻なものになつてゐる。もともと、そこには現在多摩結城の生産を組織している織元が八王子産地内でも資本力のある企業というわけではなく、分業の頂点にありながらも単独では十分に対応できないという事情があつたわけである。

第二は、先の第一に関連するが、個々の織元を中心にした仕事の流れは比較的スムーズにいくが、分業体制の中での関係者全体の集団としての意思の疎通に欠ける点にかかわる問題である。例えば取引条件をみても単価、支払方法等もマチマチで、しかも加工業者に不利になつてゐる。そこには仕事量全体が減少してゐるといふ需給関係の悪化が大きく影響してゐるのはいうまでもない。本来ならば加工業者数の著しい減少は技能独占の状態を招来して、取引条件改善への交渉力に通じるはずであるが、現実には技能独占的優位性は発揮されない。これは下職層が現実の技能独占の状況や、下職どうしの団結による交渉力に無関心であることにもよるが、さらに加えて、現在の特殊な仕事に特定化され、他の仕事に容易に転換できないという分業がもたらしたむしろマイナスの意味での効果が作用してゐることも見逃すわけにはいかない。

以上を総括すると、現在の多摩結城を生産するに當つての社会的分業体制の特徴は、專業化した加工業者を織元が組織化してゐるとはいいいながら、実際は織元の工場の外業部としての家内労働利用という性格が強く、加工業者は事実上の賃労働者であると考える方が自然であるだろう。しかも彼らは特殊な技能に依存せざるをえない

地場産業における社会的分業体制の基礎構造

状況であり、多摩結城の生産量が停滞し続けていくならば、生活破壊にさえ直面せざるをえない性格をもっているわけである。

(1) 多摩結城関連の織元の場合、保有織機台数はほぼ一〇台前後であり、そのうち多摩結城分の小幅織機は二〜三台というのが実状である。また、多摩結城分についてはほとんど内機であり、出機のケースは少ない。

(2) 八王子織物業の社会的分業の発生については幕末頃であると推測されている。「幕末の八王子織物業は、製糸(従って養蚕)が織布部門から一部分離し、それにともなつて、撚糸、染色などの諸工程もまた機業家から分離しつつある段階とすることが出来よう」(正田前掲、三九三頁)。また、八王子などのような先染産地では、「製糸の商品価値を高めるのは凶案、織法であり、これは高級品になるほど各工程が複雑となり、分業が高度に行なわれ、各々専門分化する。織元の利潤を左右する生命が、これら分業を如何に自己に結びつけて新製品をつくるかにある。それ故に、専門化された各分業は織元の隷属下におかれた」(三瓶孝子『日本機業史』雄山閣、昭和三六年、三五九頁)といわれる。

(3) 「機業において家内労働が発生するためには、問屋或は織元が発生し、彼等が自己の計算の下に原料を購入し、その下ごしらえ、製織とを賃業として下請させるところの間屋制家内工業が生じなければならない。……問屋あるいは織元のもとに加工賃をうけて製織するのが賃業である。分業の発達に伴つて、製織のみならず、撚かけ、下ごしらえ、染色等の準備工程もまた賃業、すなわち家内労働となつた」(三瓶前掲、五五八頁)といわれている。

(4) 東京都立繊維工業試験場『30年の歩みと業界』昭和三四年、七四頁。

(5) 企業間信用が膨張し、長期の手形で取引されるのが普通であるという地場産業についても、下職層への支払いだけは現金というのが常識であるが、現状の多摩結城加工業者への支払いの中には、わずか月二〜三万円のものについても手形で支払われている場合がある。

四 下請加工業者の位置と問題

先にも述べたように、多摩結城生産についての社会的分業体制は、過去の形骸をひきずりながら内実はほぼ問屋制家内工業として組織されているわけだが、実際の下請加工業者の状況は著しく零細であり、生業から脱皮できないまま織元の好・不況に左右され、ほとんど独立的な機能を發揮できないまま、隷属化された低い底辺部分に位置させられているとみることがができる。このような一般的な下請加工業者の状況を前提に、次に各加工業者別に問題となる点を明らかにしていくことにしよう。⁽¹⁾

(1) 張糸業者、撚糸業者

張糸業者は八王子産地に約三五業者いるといわれているが、多摩結城関係のお召糸の張糸技術を保存・継承しているのは、現在家族だけで構成されている三業者にしか過ぎない。しかも、実際に張糸作業を行なえるのはわずか四人である。さらに全体の仕事量が十分でないために、うち二人はほとんど作業をすることもなく、全く関連のない業種でのアルバイトで糊口をしのいでいる状況である。

生産構造的にみると、織元から委託された糸を自家製造の特殊な糊で張っていくわけであり、形態としては織元からの委託加工の形となっているが、実際は一〜三の織元の仕事に固定されざるをえず、事実上の賃労働者であるところの家内労働者であると考えた方が正しいであろう。このような表面上、事実上の二重の性格から現実には次のような問題を発生させている。

地場産業における社会的分業体制の基礎構造

地場産業における社会的分業体制の基礎構造

第一に、仕事の継続性、安定性が保証されない。

第二に、特定織元への依存が強いという系列的色彩のために同業者間の接触がなく、取引条件がマチマチで、しかも張糸業者にとって不利な形となっている。

第三に、産地の存続にもかかわるが、後継者の育成について、織元、張糸業者ともにはっきりとした展望を持っていない。これは現在の多摩結城が衰退局面にあるという事情から、両者とも後継者を育成していく余力がないことが影響している。

このような状況は、多摩結城の生産が著しく減少してきたという基本的な市場条件の下で、張糸業者に代表される加工業者が織元の外業部的な存在となり、事実上の賃労働者化し、分業体制そのものの存立条件が問われているところから発生したものである。実際、産地では小規模に属する多摩結城産出の織元が、多摩結城衰退の中で加工業者を十分に保護できなかったことも考慮に入れなければならないが、それにもまして、一つの製品の衰退局面は、その製品を作り出してきたはずの分業体制を解体する方向に導き、下請加工業者を著しく困難な状況に追い込むことになるという点にも注目しなければならない。それは分業体制自体の解体のプロセスであるからであり、われわれに分業体制に内在する基本的な問題を先鋭的な形で提示することにもなるからである。⁽²⁾

こうした事情は燃糸業者についても同様である。燃糸業者は織元からの糸を張糸業者を経由して受託加工の形で強燃をかける。現在産地約一四五燃糸業者の中で多摩結城用の八丁燃糸機を実際に動かしているのは三業者、職人数は事実上三人ということになる。取引織元は各々一〜三業者程度で、仕事量の全般的な減少から、全く関連のない仕事で糊口をしのいでいる場合が多い。このような状況を含めて、燃糸業者は先の張糸業者同様に表面

上は織元からの委託加工という形態であるが、事実上は家内労働者であることには変わりはない。したがって、先の張糸業者のところで提出した構造的な問題は、この撚糸業者にも共通することになるわけである。

(2) 意匠・紋紙業者

意匠・紋紙業者は多摩結城関連業者の中では特殊な位置を占めている。八王子産地は現在紋織技術については全国でも最高水準にあり、絹の紋織ネクタイ、紋ワール着尺などにその技術は十分にいかさ⁽³⁾れている。現在の八王子産地の意匠・紋紙業者の数は約一四〇であるが、そのうち多摩結城の紋紙作成に関係している業者は三〇四に⁽⁴⁾し⁽⁵⁾か⁽⁶⁾ず⁽⁷⁾ぎ⁽⁸⁾ない。

ところで、この多摩結城の紋紙作成に携わっている意匠・紋紙業者については、多摩結城の占めるウエイトはほんのわずかであり、ほとんど全ては紋ワールないしネクタイに関係している。しかも多摩結城の紋柄の難しさで鍛えあげられた職人達は、その技術的な高さを他の織物にいかし成功を納めているようである。このような状況から、意匠・紋紙業者と多摩結城の織元との関係は、固定的ではあるものの先の張糸業者や撚糸業者とは根本的に異なっていて、純粹に発注―受注関係と考える方が妥当である。つまり、八王子意匠・紋紙業者一四〇軒のうち⁽⁴⁾の⁽⁵⁾あ⁽⁶⁾く⁽⁷⁾ま⁽⁸⁾で⁽⁹⁾一軒であり、多摩結城も扱えるというに⁽⁴⁾す⁽⁵⁾ぎ⁽⁶⁾ず⁽⁷⁾、特定の織元に対する家内労働者的な立場には⁽⁴⁾な⁽⁵⁾い⁽⁶⁾。

したがって、意匠・紋紙業者についての問題性は先の張糸業者などとはやや異なっていて、多摩結城にかかわる意匠・紋紙業者の存亡うんぬんよりは、多摩結城衰退の過程で多摩結城によって高められたはずの意匠・紋紙

地場産業における社会的分業体制の基礎構造

技術が消滅してしまうところにある。現在の業者の状況をみると、三々四々の業者の主人と目される人だけが技術を持っているが、多摩結城の仕事量がわずかであること、将来を展望できないことなどから、自分の子弟や従業員に技術を伝承しておらず、後継者の育成については悲観的である。

いづれにしても、意匠・紋紙業者の場合には、多摩結城によって高められていた技術を他の織物にかすことによって、多摩結城関連の特定織元の下に統合されるという状況から抜け出し、八王子織物産地全体の社会的分業体制の中に広く位置づけられる形で専門企業化を実現しているとみてよい。そのような意味で、意匠・紋紙業者の場合には、一つの分業体制が衰退局面に入ってしまった際の下請加工業者のとりうるほとんど唯一の対応を示しているといつてよいだろう。ただしその場合でも、新たな分業体制への技術的連続性が強いかがどうか前提になることはいうまでもない。

(3) 整理・仕上業者

現在、八王子には織物整理・仕上業者は九軒、そのうち多摩結城の仕事をこなせる業者は二軒、職人数は三人である。このような数字を見る限り、多摩結城関連業者の中では最も従事者が少ない部分である。この二軒のうちわけを見ると、一軒は七〇才（昭和五二年現在）の主人がわずかな仕事を細々とやっているにすぎないのに対し、もう一軒の方は、一般の織物整理のための機械設備を導入し、従業員も五人、手広くウールから多摩結城までのいろいろな織物の整理を手掛けている。したがって、後者の場合は、多摩結城の占める割合はほんのわずかであり、二人の職人がたまたま委託される多摩結城の整理に従事することがあるというにすぎないといつてよい。

このため、この両者は多摩結城の整理の技術を保存しているという意味では同類項にまとめられるにしても、生産構造的には、前者はほぼ多摩結城だけに依存し、特定織元の下に固定化されているという意味で家内労働者的色彩が強いのに対し、後者は独立専門企業的に八王子の織元全般からの委託加工の形で存立していると考えてよいようである。

このため、この両者を同一の次元で論じることにはできないが、個別多摩結城生産の社会的分業体制における位置という視点からすると、いずれも技術的後継者を得ることができず、多摩結城衰退が一層進む中で消滅してしまふ可能性が強い。ただし、ここであげた後者の場合には、多摩結城が完全に消滅することがあるとしても織物整理業者としては存続していくことができる。というのは、後者の場合には現在の段階ですでに他の一般の織物整理に転換できているからである。

このような整理業者の現状をみる限り、下請加工業者の存続の道は、先の意匠・紋紙業者の項で述べた強い技術的連続性という客観的な条件に加えて、新たな市場が発生する場合などに積極的に参加し、機械化などによる新たな系統の技術を積極的に導入するといった主観的な対応によっても大きく規定されるといってよいだろう。ただし、分業体制の中で属人的で極端に特殊な技術に特化していった部分であればあるほど、旧来の分野に固定され、新たな展開がしにくく、その製品の衰退局面では著しい困難に直面せざるをえないことはいうまでもない。

(1) 本稿では下請加工業者の技術的な問題についてはふれないが、それについては前掲拙稿を参照されたい。

(2) 本稿の行論とはやや離れるが、われわれのいう分業体制の解体のプロセスは、一方で技術の連続性を断ち切る働き

地場産業における社会的分業体制の基礎構造

地場産業における社会的分業体制の基礎構造

をすることにも注意しておく必要がある。というのは、分業の成熟によって高められていた各分業者の技術は基本的には衰退局面で後継者を得ることができず、産地全体がそれに転換していく新たな製品の中に、技術的連続性を見出し得る者だけしか生き残れないからである。したがって、分業によって特殊化され狭い範囲で高度化した技術であればある程、次の時代には陳腐化し、消滅してしまう可能性が強い。

(3) 東京都立繊維工業試験場前掲『東京都の繊維工業』六頁。

(4) 現在の八王子の意匠・紋紙業者は約一四〇といわれているが、ほとんどが三人以下という零細規模である。したがって、多摩結城関連の織元との間には家内労働的な関係はないにしても、他のウール着尺、ネクタイ関連の織元との間には家内労働的な関係を形成している場合が多い。

五　む　す　び

以上検討してきたように、分業で成り立っていた多摩結城生産は、多摩結城自体が衰退局面にあることを反映して、分業者の状況を著しく困難にしている。現在、多摩結城生産に携わっている下請加工業者達は、長い熟練の中で特定の技能に特化し、他の分野に転換していくことが容易にできないという下職層にありがちな固有名な条件によってわずかに存続しているにすぎない。したがって、世代の交代を含む後継者を得ることはほぼ絶望的であり、今後ますます多摩結城生産が縮小していくならば、その生産を支えてきたはずの社会的分業体制は解体してしまう可能性が強い。

それにもかかわらず、分業者達を組織してきた織元層は、多摩結城が消滅し生産の社会的分業体制が解体した場合でも、二つの方向で生き延びていくことができる。

第一は、織元は、現在、製織工程と若干の準備工程を内部に保有しているわけだが、その他の主要工程の分業者達が消滅していく過程で、それらの工程を内部化し、織元自身としては縮小しながらも全工程を内部で行なう小生産者として存続するということである。このような形での縮小の過程は必ずしも非現実的なものではない。事実、一部の多摩結城に用いられている経糸への拵加工の工程は、仕事量がほとんどないことから専業者は完全に消滅し、一部拵加工を必要とする織元は内部に設備し、自ら作業を行なっている状況である。本来的には、織元層は生産工程をほとんど所有しないで、分業者を組織し商業資本的に活動する傾向が強いわけであるが、実際にはある程度の技術を保有している場合が多い。そのような場合には、分業者の消滅という事態に対しては、内部化を行なつて小生産者として縮小した形で存続しうることになる。ただし、このような形態は製品のライフサイクルからいっても末期的な段階であり、長期的な視野からするならば消滅への最後の姿といつてよいであろう。このような形を基礎に工芸作家として生き残る場合もあるが、それは本稿の行論とは異質の事態である。

第二の方向は、産業の生成・発展・衰退というプロセスからするならばより普遍的な行き方である。それは織元はあくまでも商業資本的性格が強いということに関連する。彼らはほとんど生産機能を保有しない。そのため、製品が衰退局面に入り分業者達が消滅するという事態が生じた場合には、従来の製品ないし分業者達に拘束される必要はない。つまり、彼らはより利潤の高い新たな製品を探し出し、それを作りあげるための新たな分業者達を探し出しあるいは育て、新たに組織化をしていけばよいわけである。事実、昭和三〇年以降のかつての多くの多摩結城生産の織元達の対応は、ウール着尺、ネクタイ等への転換を容易に実現したというものであった。現在の多摩結城に関連しているほんのわずかな織元達は、産地全体の新たな動きにスムーズに対応できなかった

地場産業における社会的分業体制の基礎構造

人達であり、織元の本質、つまり商業資本的性格を全く有していないわけではない。つまり、今後、多摩結城生産を支えている下請加工業者群が完全に消滅してしまい、多摩結城を作り続けていくことが不可能になったとしても、他の織物に転換し新たな生産組織を形成することによって産地に存続していくことは可能なわけである。以上のような意味で、現実の産地の生産の社会的分業体制と組織者との関係は、実は極めて不安定的、浮動的要素によって規定されているといつてよいわけである。

このような形で社会的分業体制と組織者との関係を理解するならば、われわれは日本の地場産業における分業の持つ基本的性格を次のように説明することができるだろう。

つまり、日本の地場産業における社会的分業体制の展開過程の基本図式は、分業の組織者は商業資本的性格を強め、自らは生産能力を保有せず、時代の要求する製品へ敏速に対応し、新たな分業者を組織化することによって常に生き延びていくが、実際の生産を支える分業者達は、分業自体が有する性格、つまり著しい専門化による特定技能への固定化という事情から、ある特定の製品の生産にしか存立の意味を見い出せないというものである。したがって、商業資本的性格の強い組織者を中心とする分業組織という形態は常に存続していくが、内実は分業者達の絶えることない交代によって支えられているといつてよいわけである。以上のようなプロセスが常に繰り返されるところに、日本の地場産業における社会的分業体制の基本的な意味があると考えてよいだろう。本稿で検討した多摩結城についてみると、衰退局面末期といつてよい段階であり、分業体制における組織者と分業者との関係に内在する問題が厳しい形で現われていた。それは日本産業の分業的体質の表象であり、全ての産業が通過していかなければならない一つの局面でもあるわけである。

(1) 本稿のテーマとはやや異なるが、地場産業の歴史を振り返ることによって、山崎充は地場産業の歴史的法則として次のような点を提示している。「産地の歴史は長いが、産地企業の命は短い」「地場産業の歴史は、事業転換の歴史である」(山崎前掲、二七六頁)と。このような客観的な歴史性を、われわれは本稿において、産地の社会的分業体制と組織者とのかかわりあいという観点から分析してみたわけである。

付記

本稿を作成するにあたり、松坂教授に貴重な御教示を頂いた。記して感謝を申し上げます。